

〈研究ノート〉

Collaborative Online International Learning (COIL 型教育) の実践報告

A Report on Collaborative Online International Learning (COIL)

板谷初子

Hatsuko ITAYA

Abstract:

This paper details the author's experience with Collaborative Online International Learning (COIL), specifically planned and executed for second-year seminar students at Hokkaido Musashi Women's Junior College in 2023. Comparable joint classes had previously been held with a Japanese class at the University of North Carolina at Chapel Hill in the second semester of 2022. During those sessions, the author noted a noticeable discrepancy in second language proficiency and active participation between Japanese and American students. To address this disparity, the author implemented several measures in 2023 aimed at enhancing students' communication skills. One notable initiative involved the integration of COIL in the first semester, partnering with Australian

students. The outcomes, as evidenced by a post-program questionnaire administered to Japanese students, along with feedback from Australian partner students and the cooperating teacher at UNC, suggest a significant enhancement in students' self-confidence and proficiency in English communication.

1. はじめに

本稿は、2023 年度に北海道武蔵女子短期大学（以下武蔵）英文学科 2 年生対象の板谷専門ゼミナールで実施した Collaborative Online International Learning（以下 COIL）の実践報告である。板谷専門ゼミナールでは 2022 年度に米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校（以下 UNC）の日本語クラスと COIL 授業を行い、参加した日米両大学の学生から高い評価を受けた（板谷・荒竹 2023）。両担当教員は学生がアンケートで示した高い満足度と、学生が楽しそうに授業に参加している様子から、COIL は学生の学習動機を向上させる取り組みであると確信し、2023 年度も COIL 授業実施した。その際日本側の担当教員である筆者は、2022 年度に観察された日本側の改善点に基づき 2023 年度の実施計画を立て、実行した。本稿はその実践報告である。

2. COIL（COIL 型教育）

2.1 COIL（COIL 型教育）の概要

COIL または COIL 型教育とは Collaborative Online International Learning の頭文字を取った略称である。COIL はニューヨーク州立大学（SUNY）COIL センターが 2004 年に開発した「国際協働オンライン学習プログラム」であり（朝日新聞教育ポータル 2020）、文部科学省は COIL を「オンラインを活用した国際的な双方向の教育手法」と定義している（文部科学省 2018a）。日本では、2014 年に関西大学が全国に先

駆けて COIL を導入した (関西大学国際部 2024)。また文部科学省は 2018 年に「大学の世界展開力強化事業～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」として 10 件の COIL の取り組みを採択した¹⁾(文部科学省 2018b)。

2.2 日本における COIL の現状

筆者が 2024 年 1 月にインターネットで検索したところ、COIL を実施している日本の大学は文部科学省の採択を受けた 10 校に加え、麗澤大学、拓殖大学、日本大学などがあつた。道内では北星学園大学がチームで COIL 型教育を推進している (北星学園大学 2023)。文部科学省が「国際的に活躍できるグローバル人材の育成と大学教育のグローバル展開力を強化」を掲げ支援事業を行ってから 5 年以上が経過しているが (文部科学省 2018a)、COIL はまだ日本の大学に広く浸透していない印象がある。その要因として推察されるのは、同じ志を持つパートナー教員を探すのが容易ではないこと、及び、COIL プログラムの構築には、相手側との打ち合わせ、実施、振り返り等を含めた負担が大きいことなどである。文化が異なる大学の授業を合同で行うということは、クラスサイズ、学生の特性、授業のねらい、課題の質と量、時差など、様々な事柄を調整してでも COIL に価値があると信じるパートナー教員との連携が欠かせない。

2.3 アメリカ及び UNC における COIL の現状

日本と同様にアメリカの教育界でも COIL を推進する事業が展開されている (American Council on Education 2024)。それを受けて UNC の OFFICE OF THE VICE PROVOST FOR GLOBAL AFFAIRS は COIL を始めとする国際協力に基づく教育を推進し、COIL を行う教員には 1 セメスターあたり \$ 2,500 の超過勤務手当 (Award) を支給している (付

録1)。さらに3年以上COILを実践した教員には、相手校への訪問や海外学会大会への出張費が支給される。このようにUNCは大学を挙げてCOILを推進している。

2023年度に板谷専門ゼミナールがパートナーとなっているUNCのCOILのコースは、UNCのホームページのCOIL Courses By Semester, Fall 2023というカテゴリーに、以下のように記載されている(UNC GLOBAL AFFAIRS 2024)。

Collaborative Online International Learning - UNC Global

JAPN 401: Gateway to Mastering Japanese

Yuki Aratake, Asian Studies, College of Arts & Sciences

**Partner: Hatsuko Itaya, Hokkaido Musashi Women's Junior College
(Japan)**

また付録1に示したUNCの2024年度COIL Curriculum Development Award Letterにも、本学の名称と日本側担当教員名が記されている。

3. 2022年度に実施した初年度のCOIL授業

3.1 2022年度のCOIL授業の概要

2022年の授業概要は本学紀要第55号に詳述しているため(板谷・荒竹2023)、本稿ではその概要を記す。本COIL授業は、コロナ禍で留学を断念した学生や費用面から留学を諦めた学生たちに、同年代のネイティブスピーカーと共に学ぶ機会を与える試みである。概要は次の通りとなる。日米両国の大学で授業が開講されている9月～11月(本学では後期)にZoomで5回のCOIL授業を行った(表1)。時差があるため日本では午前9時、アメリカでは午後8時の授業であり、自宅からの参加が認められた。学生たちは2人1組のチームで表1のテーマに関するプレゼンテーション(以下プレゼン)を第2言語で行った。武蔵生は事前

に授業でリハーサルを行い、クラスメートからの助言を元にプレゼン内容を改善して本番に臨んだ。

表 1 COIL 授業の日程と各回のテーマ

	日時	テーマ
1	9月30日	自己紹介・学校紹介
2	10月14日	ゴミ問題
3	10月28日	女性の社会進出
4	11月11日	大麻・ドラッグ
5	11月18日	同性婚

表 2 は各回の授業の大まかな流れである。プレゼンの原稿は事前に用意することができるが、発表後の質疑応答やブレイクアウトルームでの会話は事前の準備が難しい。そのため、武蔵生にはそのテーマに関する語彙リストを全員で協力して事前に作成、共有させた。

表 2 COIL 授業の流れ

1	司会（教員が交代で行う）が今日の授業の流れを説明	3分
2	日本人学生 2 人（A & B）が英語でテーマについてプレゼン→アメリカ人学生が英語で質疑応答	6分
3	アメリカ人学生 2 人（C & D）が日本語でテーマについてプレゼン→日本人学生が日本語で質疑応答	6分
4	A、B、C、D を司会として、4 つのブレイクアウトセッションで、テーマについてディスカッション（8 分×2 言語）	16分
5	リーダーが話し合い内容を、第二言語で、1 分で要約	4分
6	各教員からコメント	4分
7	司会が次回の COIL 授業の確認をして終了	1分
8	フリーディスカッション	10分

本 COIL 授業の特色の一つはバディシステムである。バディシステム

では、1グループ4人程度の固定されたメンバーで授業時間外に自由に時間を設定し、指定されたトピックに関するディスカッションを行う。その後各自がその内容を第二言語でレポートにまとめ、バディの添削を受けてから提出する。日本人の学生は300語以上の英語、アメリカの学生は400字以上の日本語でのレポートである。学生たちはSNSを通じて話す日時を決めたため、そのやりとりも真正性のある言語活動となり、バディシステムを通じて「初めて外国人の友達ができたと感じている学生も複数いた。表3はバディシステムの回数とトピックを示している。バディシステムについても学生の満足度が高く、教師のいない環境で自由に話せるため、本当に友達とおしゃべりをしている気分になったという感想が多く寄せられた。

表3 バディシステムのトピック

	予習文献の内容
1回目	Family Life (英語)
2回目	教育制度 (日本語)
3回目	Holidays (英語)
4回目	世界が100人の村だったら(日本語)
5回目	Parties, Dating and Romance (英語)

学生はCOIL授業の準備に加えてバディシステムを2週間に1回のサイクルで行った。そのスケジュールが過密であったため、2023年度は回数を4回に変更するとともに、レポート添削の負担を軽減するべく統一したシンプルな添削方法を示すこととした。レポートの添削方法については、6.2で説明する。

3.2 2022 年度 COIL 授業で観察された改善点

初年度のアンケート結果では、日米共に 100%の学生が COIL 授業について「とても良かった」または「良かった」と回答した(板谷・荒竹 2023)。一方、修正点も見つかった。まず学生の負担軽減のため、バディシステムの回数を減らし、時間をかけずに行える添削方法を示した。しかし最大の課題は日本人学生の発言が少ないことであった。ブレイクアウトセッションでは、日本語しか使えない時間と英語だけしか使えない時間を設けているものの、日本人学生の英語力よりもアメリカ学生の日本語力が勝るケースや、語学力以外の積極性の差があり、英語ではほとんど発言しない日本人学生がいた。そのため、2023 年度は前期に COIL 授業の実践練習を行い、後期の UNC との COIL 授業に備えたいと考え、筆者は 2023 年度「教育改革関連事業費」の申請を行い採択された。

4. 「教育改革関連事業費」を利用した 2023 年度 COIL 実施計画案

武蔵生の発言力強化を目指し、2023 年度前期にも COIL 授業を行うこととしたものの、日本の前期にあたる 4 月～8 月にアメリカの大学では授業が行われていない。そのため、日本の前期にあたる期間に授業があり、時差が少なく、日本語教育が盛んなオーストラリアの大学との COIL を目指した。パートナーを探すため、日本語授業を行っているオーストラリアの大学をインターネットで調べ、10 校に COIL 授業の提案をするメールを送ったが、1 校から断りの返信があり、それ以外の大学からは返信がなかった。そのため本学の「教育改革関連事業費」を活用して、エージェントに仲介を依頼しパートナーを探した。それでも興味を示す大学は見つからなかったが、日本語授業を行っているクイーンズランド州にある West Moreton Anglican College の協力を得て、日本

語授業を受講している学生たちを対象に COIL 授業参加者を有償で募集した。日本では高校3年生にあたる2名の女子学生から応募があった(付録2)。面接を行い、この2名に協力の依頼をすることとした。

UNC との COIL 授業の場合、筆者は UNC の教員と授業内容を話し合い、それぞれの教員が自分の学生の指導を行う。しかしオーストラリアの高校生は個人で参加しているため、彼女たちに対するオリエンテーションをエージェントとともに事前に Zoom で3回行った。それにより協力学生たちは自分たちの役割を正しく理解し、プレゼンや本学学生の英文添削等を適切に行うことができた。

このようにして、2023年度は後期の UNC との COIL 授業に備えて前期から COIL 授業を行い、学生の積極的な参加姿勢を育む機会を得ることとなった。

5. 2023年度に実施した前期 COIL 授業

5.1 前期の COIL 授業実施概要

前期は後期の COIL 授業をスムーズに行うための予行訓練が目的であるため、授業の流れやテーマは意図的に前期と類似させた(表4)。

表4 2023年度前期 COIL 授業のテーマ

回	COIL 授業テーマ
1	自己紹介とアイスブレイク
2	アルバイトと仕事
3	同性婚
4	差別
5	違法ドラッグ
6	女性の社会進出

後期の COIL 授業は、日本語と英語を半分ずつ使う形式だが、前期は

全て英語での授業である (表 5)。その点では英語を使う時間を多く確保できたが、本来はもう少し英語ネイティブスピーカーの数がほしいところであった。多くの協力者を確保することができず、このことから COIL の実施は容易ではないことを実感した。

表 5 2023 年度前期 COIL 授業の流れ

時間	内容
5 分	教員が授業の流れを英語で説明
6 分	日本人学生 2 名がテーマについて英語でプレゼン プレゼンの前に 1 分でキーワードの語彙表を示し説明
3 分	オーストラリアの学生 2 名が英語で質問・コメント
6 分	オーストラリアの学生 2 名がテーマについて英語でプレゼン プレゼンの前に 1 分でキーワードの語彙表を示し説明
3 分	日本人の発表者以外の学生が英語で質問・コメント
10 分	2 つのブレイクアウトルームで英語ディスカッション
2 分	ブレイクアウトルームでの内容を日本人学生が英語で要約
10 分	全員でフリートーク (言語は自由)
5 分	教員が次回の授業日時とテーマを確認して COIL 授業終了 武蔵生のみその後 40 分授業を継続

当初 COIL 授業を 50 分で計画していたが、実際には話が弾み 60 分を超えることが多かった。フリートークでは言語を自由にして、オーストラリアの学生が日本語で話す機会も設けた。この集団では日本人学生の英語力がオーストラリア人学生の日本語力に勝っていたため、武蔵生は気後れせずに COIL 授業に参加できた様子であった。

5.2 英語要約文添削例

前期には、各 COIL 授業のあとに本学学生が授業内容に関する 100 語以上の英語要約文を作成し、授業当日から 3 日以内にオーストラリアの学生に送り、添削を受けてから修正した要約文を 6 日以内に提出すると

いう課題を課した。2名の添削者は数日中にそれぞれ6人分の要約文を添削するため、短時間で作業が行えるように、シンプルな添削ルールを提示した(表6)。

表6のOriginal Summaryは、本学学生が添削者に送った英文である。添削者は特に修正が必要だと思う3点を選び出し、その箇所をそれぞれ違う色の蛍光ペンで塗り(本稿では便宜上3種類の下線を引いて示す)、その3点について修正文とその理由を示して返却する。本学学生は添削を受け要約文を修正し、Final Versionとして仕上げ、期限内に提出する。Original Summary(元の要約文)、Corrections(修正点)、Final Version(最終版)の全てを提出させることで、教員は学生の学習過程を把握することができる。

表6 2023年度前期英語要約文添削例

100-Word Summary
Student No. (xxx)
Name (yyy)
Corrector's Name (zzz)
Original Summary: Between 90 and 110 words. (97) words
<p>Thank you for today's class. In the past, women couldn't live freely because men had more power. However, women are having more working opportunities year by year. Unfortunately, there is still a wage gap between men and women. Older people sometimes have prejudice <u>about</u> how men and women live, and say nasty things. <u>However, in recent years, it is important</u> to live freely regardless of gender, and gender discrimination is decreasing. I hope that women will be more active in society. Also, I think <u>men should have more time to spend with their families and do housework.</u></p>

3 Corrections: Highlight 3 parts or sentences that could be improved. For each highlighted part, please show an alternative expression below.

1. towards (when following the word 'prejudice' you can also use 'towards')

2. However, living with the values in today's society, it is more important (Rephrased to make it more sophisticated. By saying values it reenforces the focus of the sentence.)

3. men should be able to spend more time with their families, help out with housework and taking care of children. (just another way you could phrase this, and says the things that are kind of implied. It's not bad to imply what you mean, but this is just another way of phrasing it.)

Final Version

(109) words

Thank you for today's class. In the past, women couldn't live freely because men had more power. However, women are having more working opportunities year by year. Unfortunately, there is still a wage gap between men and women. Older people sometimes have prejudice towards how men and women live, and say nasty things. However, living with the values in today's society, it is more important to live freely regardless of gender, and gender discrimination is decreasing. I hope that women will be more active in society. Also, I think men should be able to spend more time with their families, help out with housework and taking care of children.

表6の添削内容を解説する。1番は about を toward に変更するという語彙語法に関する修正である。2番は現行の文に living with the values in today's society 「現代社会の価値観に従って生きる」というフレーズを追加することで、この文全体がより知的で洗練されたものになると

助言している。3番は men should have more time to spend with their families and do housework 「男性は家族と過ごし家事をする時間をもっと持つべきである」という表現を men should be able to spend more time with their families, help out with housework and taking care of children 「男性は家族と過ごし、家事や子育てを手伝うことにもっと時間を費やすことができるようになるべきである」に変更するよう提案している。学生が書いた men should have more time という表現に文法上のミスはないものの、「(主語である) 男性がより多くの時間を有する (have) ことは男性の義務である」というニュアンスになる。時間を有しているかどうかは、必ずしも本人の意思や努力のみで解決できることではない。この場面での have は「無意志動詞」であり、「無意志動詞」を義務の助動詞 should と組み合わせることは適切ではない。動詞を「意思動詞」の spend に変更し、さらに be able to を加え修正された men should be able to spend more time は、「男性がもっと多くの時間を過ごすことができる (状況に) なるべきである」というニュアンスに変わる。修正後の英文は、男性だけを悪者扱いするのではなく、「男性が積極的に家事や子育てに参加できる状況に世の中全体がなっていくことを望む」というニュアンスの、より洗練された表現になる。

もう一つの注目点は句動詞である。句動詞とは「動詞+前置詞」、「動詞+副詞」、「動詞+副詞+前置詞」などの組み合わせの、センテンス内において独立した意味単位として扱われる表現である。第二言語習得の過程で英語句動詞の習得は困難とされている (中村 2013; セニサック 2022)。この要約文を書いた学生が「家事をする」を do housework と表現したのに対して、添削者は help out with housework という「動詞+副詞+前置詞」からなる 3 語の句動詞を用いた表現を提案している。3 語の句動詞は、give up のような 2 語の句動詞よりも日本人にとってさらに習得が困難であり、日本人教員が添削した場合にはこのような 3 語か

らなる句動詞を学生に提案することができる確率は下がると推察する。事後アンケート（付録3）では、英文添削について「文法的には正しいが不自然な表現をネイティブらしく直してもらえた」「ネイティブの使う英語を知ることができた」などの感想が書かれている。そのため添削には一定の効果があったと判断している。

5.3 オーストラリア人学生からの事後コメント

2名の協力学生から COIL 授業終了後に、自由に感想を書いてもらった（付録4）。両名とも以下の抜粋コメントのように本学の学生について「初めはあまり話せなかったが、次第に自信をつけ話せるようになっていった」という趣旨の感想を記している。数ヶ月の COIL の成果を客観的に数字で表すことは難しいが、本学学生の英語コミュニケーション力向上の度合いは、協力学生たちが認識できるレベルであったことが伺える。

〈1人目のコメント〉

I noticed that at the start the students did not have much confidence with speaking English but as the program and classes went on they grew more confident and spoke more in the separate groups.

〈2人目のコメント〉

As expected, the students were a little shy at first, but after the initial ice-breaking session, we became a lot more comfortable with each other. Through their spoken and written responses, I could tell that they were very ambitious and hardworking students and by the last session, I noticed that their confidence in English had improved significantly.

6. 2023 年度に実施した後期 COIL 授業

6.1 後期の COIL 授業実施概要

UNC との COIL 授業の大枠は第 3 章で示した 2022 年度版を概ね踏襲している。わずかな変更点としては、COIL 授業の回数を 5 回から 6 回にしたこと、プレゼンのテーマを一つ変更したこと、バディシステムの回数を 5 回から 4 回にしたこと²⁾、バディのレポートの添削の仕方を明示したことなどが挙げられる。2022 年度は武蔵生 11 名、UNC 生 8 名であったが、2023 年度は武蔵生 12 名、UNC 生 19 名であった。そのためブレイクアウトルームでは、日本人が 1～2 名になることもあり、日本人学生が積極的に話さなければならぬ環境であった。幸いにも 2 回目の COIL 授業のあと UNC の教員から、「本年度の日本人学生たちは昨年度よりも積極的に話している」という趣旨の発言があった。筆者は、日本人学生の積極性が昨年度の学生よりも高かった要因は 2 つあると考える。1 つは前期に COIL 授業を行ったことである。5.3 で示したように、2 人のオーストラリア人学生は、COIL の初期の段階と後半で学生の積極性が向上したと報告している。つまり日本人学生は、話すことに慣れた状態で後期の COIL をスタートすることができたと考えられる。もう 1 つの要因は、板谷専門ゼミに留学した学生と語学研修に参加した学生が多くいたことである。12 人中 4 人が英文学科の短期留学制度を利用して約 4 ヶ月イギリスへ留学し、6 人が 3 週間のオーストラリア語学研修に参加した。そのため元々英語でのコミュニケーションや異文化に関心のある学生が多い集団であったと言えるであろう。いずれにしても、前期の COIL 授業が後期への効果的な準備になったことは間違いない。

6.2 バディ同士によるレポート相互添削

前期は武蔵生が書いた英文をネイティブが添削した。後期は武蔵生と

UNC の学生が、互いのレポートを相互添削した。添削の仕方に偏りがでないように、また短時間で終わるように、本年度は表7のような添削例をあらかじめ学生に示した。アメリカの学生は同じ方法で日本人学生の書いた英文を添削する。

表7 学生に指示した日本語を添削する方法

【添削方法】

明らかに間違っている点は赤で修正する。間違いではないが自分ならもっと別の表現をするという点は青で修正し、可能であればコメントを書く。コメントには母語の使用可（本稿では便宜上「赤」を一重下線、「青」を二重下線で示す）。

〈アメリカ人学生の書いた文章例〉

今週はアメリカの家庭観について話しました。アメリカと日本の家庭観を比べることができ、とても良い経験でした。さあ、アメリカと日本の家庭観はどんな違いがあるのかもっと詳しく説明しましょう。

↓添削例

アメリカと日本の家庭観はどんな違いがあるのかより詳しく説明していきます。コメント:「さあ~しましょう」というのは、エッセイには不自然な感じがします。テレビの司会者が話すときなどに使われることが多い表現だと思います。

アメリカでは、いろいろな家庭観があつて、未婚していないカップルや再婚されたカップルも同時に存在しています。

↓添削例

アメリカでは色々な家庭観があり、結婚していないカップルや (or 未婚のカップルや) 再婚したカップルもあります。

表8は Socializing at Parties & Dating and Romance というテーマで行ったバディシステムのディスカッションについて、日本人学生が書いた英文をアメリカ人学生が添削した例である。

表 8 日本人学生の英文をアメリカ人学生が添削した例

〈日本人学生が書いたエッセイ〉

* 本稿では便宜上「赤」を一重下線、「青」を二重下線で示す。また番号は筆者が付したものである。

〈Socializing at Parties & Dating and Romance〉

We discussed dating customs in each nation. I discovered that there was not much of a difference between America and Japan. First, some people have installed ① the dating app to meet a variety of people in both countries. Apps like Tinder, Hinge, and Bumble are widely used. ② It is used by people who are not interested in ③ making love. ④ There are a lot of physical relationships among Americans. This happens in Japan as well. Also, other places to ⑤ see people are at part-time jobs, universities, clubs, bars, and bus stops. I was surprised because ⑥ I had never heard of bus stops in Japan. I think there are a lot more interactions in the U.S than in Japan because many more events are held there. In addition, American couples frequently live together before getting married. ⑦ We stay so that we can observe one another's way of life. Understanding one another's way of life is crucial. Two years is regarded as a lengthy time to be in a relationship in the U.S. Furthermore, it's commonly accepted that friendships between men and women are viable in the U.S. On the other hand, some claim that it is not feasible in Japan. I thought that a lot of Japanese people still ⑧ thought in old ways. Also, there are womanizers in both nations, and ⑨ attractive people are frequently the focus of them. It was challenging to talk about this subject. In the U.S, people don't directly ask for a relationship before they begin dating. Before going on a date, they ⑩ were friends for a long time. It is not as formal as it is in Japan. I discovered the term "guy friend" refers to a male friendship. Furthermore, unrequited love and the friend zone are similar. It was good to learn the actual language used. The final zoom was a great experience with enjoyable conversations. ⑪ We could discuss each other's real circumstances.

〈アメリカ人学生の添削例〉

① the dating app: change to 'dating apps' (more general, "the dating app" is really

specific)

② It is: since you are talking about multiple dating apps, you would change “it is” to “they are”

③ making love: actually, in the US, “making love” means having sex. so, it’s a little funny, but people do use dating apps because they are interested in making love (having sex). If you mean that people are *only* interested in having sex on the dating apps, change to “people who are not interested in finding love”

④ There are a lot of physical relationships among Americans. This happens in Japan as well.: These are perfectly fine the way they are. But, if you wanted to sound a little more fluent, you could combine them into “There are a lot of physical relationships among Americans, which is common in Japan as well.”

⑤ see people: change to “find partners” or “find people”. see people just means to physically see them in this situation. (to see someone can mean to date someone, but in this sentence it means just to literally see them)

⑥ I had never heard of bus stops in Japan: this sounds like you don’t know bus stops exist in Japan. Change to “I had never heard of people meeting partners at bus stops in Japan”

⑦ We stay so that we can observe: Not sure what you mean here. Maybe change to “couples live together before marriage to observe each other’s way of life”

⑧ thought: change to “think” (present tense)

⑨ attractive people are frequently the focus of them: not sure what you mean here, but maybe change to “Also, there are womanizers in both nations, and they are usually attractive men.”

⑩ were friends for a long time: sounds unnatural, change to “Before going on a date, two people can be friends for a long time.”

⑪ We could discuss: a little unnatural, change to “we discussed” or “we got to discuss”

Really great job, xxx (日本人学生の名前)!

紙面の関係上全ての添削箇所についてコメントすることは控えるが、

⑪は日本人が陥りやすい誤りであるため、この点について解説する。⑪についてアメリカ人学生は、We could discuss: a little unnatural, change to “we discussed” or “we got to discuss”（「We could discuss という表現は少し不自然なので、we discussed または we got to discuss に変更して下さい」とコメントしている。日本語では「お互いの本当の状況を話し合うことができました」のように「ことができました」という表現で文章を締めくくることがある。おそらくこの日本人学生は日本語で文章を考え、それを英語で We could discuss each other’s real circumstances. と表現したのであろう。しかし英語での could のニュアンスは「かもしれない」という可能性・推量が中心で、「何らかの良い機会を得ることができた」という意味合いでは get to～が自然である。この get to～の用法はネイティブが日常的に使用しているのにもかかわらず、日本の英語教育現場で取り上げられることが少ないというのが筆者の個人的印象であり、同様のことが英語ネイティブスピーカーによっても指摘されている（セニサック 2015）。このようなネイティブによる添削によって自然な英語表現に触れる機会が増えるのは、相互添削のメリットと言えるであろう。学生たちにとって、母語を教える経験は、自尊心や自己効力感を保ちながら語学学習を続ける方法の一つであると考ええる。

6.3 日本人学生対象のアンケート結果

本節では日本人学生を対象に行ったアンケート結果を解説する。UNC でも同じ内容のアンケートを実施しているが、本稿執筆の時点でその結果が出ていないため、日米での比較は別の機会に譲るものとする。ここでは要点についてのみ言及するため、詳細は付録3を参照されたい。

昨年同様、COIL 授業を「良かった」（2人）または「とても良かった」（10人）と回答した学生は100%であった（設問1）。また、「（COIL 授業を経験した上で）もう一度 COIL 授業を選べるとしたら選ぶか」、という

問いに対しては 12 人全員が「選ぶ」と回答した (設問 32)。これらの結果から、学生たちは COIL 授業の経験を肯定的にとらえていることがわかる。自由記述欄に書かれた「日本にいると英語を話す機会が少ないので、スピーキングを伸ばしたい自分にとって良かった」「同じ年齢の大学生と実際に会話をし、ネイティブの英語を知ることが出来ました」などのコメントからは、同年代の外国人と交流をしたいという学生たちの思いを感じ取ることができる。一方で COIL 授業は負担が大きいことも伺える。設問 35 の自由記述欄には「他のゼミと比べるとやることが多く正直大変だったが、そのぶん力になったとも思う」というコメントがあり、設問 11 では 5 人が「緊張した」、9 人が「準備が大変だった」と回答しており、楽な授業ではないことがわかる。それでも設問 5 の「COIL 授業で良かったことは何か」という問いに 10 人が「外国人と会話が出来た」ことを挙げており、また先述の通り設問 32 で全員が「再び COIL 授業を選ぶ」と回答していることから、学生の切望する「同年代の外国人との交流」を提供する COIL は、学生の学習動機を高める教育法だと考える。

1 年間専門ゼミで COIL を行ったことによる英語運用能力の向上を、客観的に数字で証明することは難しい。仮に何らかの試験の点数が伸びたとしても、その伸びが COIL だけの効果であるとは言い難い。そのため本稿では、参加した人たちの主観をもとに本 COIL 授業が英語運用能力に与えた影響を推測する。

まず設問 24 の「バディシステムで実際に使われていた言語の割合を、合計で 100% になるように書いて下さい」という質問に対する回答の平均数値は、英語 62%、日本語 38% であった。この数値はあくまでも学生たちの主観である。しかし、同じ質問に対する 1 年前の学生たちの回答の平均数値が英語 17%、日本語 83% であったことと比較すると、少なくとも昨年の学生たちよりも英語でのコミュニケーションが積極的にでき

ていたとみなすことができるであろう。

また、設問 31 の「COIL 授業はあなたの英語力を高めましたか？」という質問に対して、12 人中 7 人が「高めた」、5 人が「とても高めた」と回答している。さらに設問 2、6、14、28、33、35 の自由記述欄にも、自分たちの英語力が高まったことを実感する感想が書かれている。それに加えて、前期に COIL 授業に参加したオーストラリアの学生が、本学の学生の英語コミュニケーション能力の向上を感じている (5.3 参照)。また本年度の COIL 授業が終わった直後に UNC の担当教員から寄せられた感想にも、昨年と比較して本年度の学生は積極的にコミュニケーションをとっていたことが書かれている (全文は付録 5)。

武蔵の学生たちの英語でのコミュニケーションへの積極的なアプローチは、昨年よりも一段と強く感じられました。同様に、発表においても昨年よりも発音が向上し、理解しやすくなったと印象を受けました。

学生の会話力を高めるために、前期にも COIL 授業を行ったのに加えて、対面での授業では会話用教材 (森沢 2007) を用いて、瞬時に英文を構成し話す訓練を行った。設問 15 と 16 での回答から、学生たちは前期 COIL 及び会話教材のどちらからも効果を感じていたことがわかる。

まとめると、負担は大きかったものの、学生たちは COIL を肯定的にとらえ、COIL による学習効果を実感していたと考えられる。

7. 課題と今後の展望

来年度に向けてはいくつかの課題がある。一つは両国の学生数のアンバランスである。1 年目は日米の学生数がそれぞれ 11 人と 7 人であったが、2 年目は 12 人と 19 人であった。来年度の専門ゼミ生は減少することが見込まれているため、日米学生の人数に差がでる可能性がある。

そのため日本人学生 1 人 1 人が発言量を増やせるよう、対面の通常授業でトレーニングが必要である。具体的には、相手の言っていることがわからないときに、黙り込んでしまわないためのコミュニケーションストラテジーを身につける訓練が必須であると考え。本年度のアンケート結果からもネイティブの英語が速すぎて何を言っているのかわからなかった、という趣旨のコメントが複数見られた。英語を聞き・話す力を付けるためには、毎日継続して学習することが欠かせない。学生が授業外で毎日英語を聞き・話す時間を十分に確保するために、来年度はスマホのアプリを利用した課題を課す予定である。

2 つめの課題はプレゼンの準備方法である。同じテーマについて日米それぞれの学生がプレゼンをするが、どちらの学生もほとんどインターネットから情報と写真を入手し、それをまとめているに留まっている。インターネットはボーダレスであるため、プレゼン内容は日本人（またはアメリカ人）だけが話せる内容ではないことになる。せっかくの International Learning であるのだから、日本人にしか提供できない第一次情報を自分で取得して発表することを目指してほしい。来年度はそのためにフィールドワークを行い、自分で獲得したローカルな第一次情報を、自分で撮影した写真や動画と共に発表する場を設けたいと考えている。ローカルな情報を海外に向けて英語で発表するというのは、まさにグローバルな活動と言える。ただしこの点についてアメリカの担当教員は違う考えを持っている。その考えとは、「これは日本語の授業であるのだから日本語さえ使っていれば目的は十分果たしている」という見解である。語学のクラスと専門ゼミでは狙いが異なる。COIL で互いのクラスの狙いや条件が同じになることはないという前提の元、それぞれの教員がそれぞれの教育目標に見合った活動になるよう、パートナー教員と打ち合わせをしながら進めていくことが、COIL 授業成功の鍵となるであろう。

8. まとめ

COIL を継続するためには、同じ志を持つパートナーの確保及び相手との緊密な連携、時差に伴う時間割の調整に対する学生及び大学の協力、授業時間外で添削や発音指導を励行する教員の熱意など、多くのハードルがある。しかし COIL の学習動機付け効果は高く、なにより学生が海外の学生との交流を楽しんでいるため、今後も課題を一つ一つクリアしながら COIL 型教育を継続して行きたい。

【註】

- 1) 採択された大学は次の計 10 件である。「タイプ A：交流推進プログラム」千葉大学、東京大学、東京外国語大学・国際基督教大学共同、東京藝術大学、鹿児島大学、琉球大学、大阪市立大学、上智大学・お茶の水大学・静岡県立大学共同、南山大学「タイプ B：交流推進・プラットフォーム構築プログラム」関西大学
- 2) 表 3 の項目の中から「世界が 100 人の村だったら」を削除した。それ以外のテーマは継続された。

【謝辞】

「教育改革関連事業費」に採択してくださった北海道武蔵女子短期大学町野和夫学長に深く感謝申し上げます。また、時差と教室調整にご配慮下さった教務係の皆様にご礼申し上げます。

【参考文献】

- American Council on Education (2024) *U.S. -JAPAN COIL INITIATIVE 2024*. 【Online】 <https://www.acenet.edu/Programs-Services/Pages/Communities/US-Japan-COIL-Initiative.aspx> (2024 年 1 月 4 日閲覧)
- UNC GLOBAL AFFAIRS (2024) *Collaborative Online International Learning*. 【Online】 <https://global.unc.edu/programs/coil/> (2024 年 1 月 4 日閲覧)

- 上野創 (2020) 「コロナ禍で注目 オンラインで海外とつなぐ教育「COIL」とは」『朝日新聞教育ポータル』【Online】<https://www.asahi.com/edu/article/13789845>(2024 年 1 月 4 日閲覧)
- 板谷初子・荒竹由紀 (2023) 「北海道武蔵女子短期大学と米国ノースカロライナ大学チャペルヒル校が実施した遠隔 COIL 授業の報告 — パンデミックから生まれた新形態の外国語授業 —」『北海道武蔵女子短期大学紀要』55, 89-120
- 関西大学国際部 (2024) 「COIL について」『Institute for Innovative Global Education (グローバル教育イノベーション推進機構)』【Online】<https://www.kansai-u.ac.jp/Kokusai/IIGE/jp/COIL/>(2024 年 1 月 4 日閲覧)
- セニサック・ジュン (2015) 「日本人に馴染みのない? 「Get to」の活用法」『Hapa Eikaiwa』【Online】<https://blog.hapaeikaiwa.com/blog/2015/11/24/>(2024 年 1 月 4 日閲覧)
- セニサック・ジュン (2022) 『ネイティブが毎日使ってる 万能英会話フレーズ 101』アルク
- 中村俊祐 (2013) 「第二言語習得における句動詞 三語句動詞の学習において日本人学習者が直面する問題点」*KEIO SFC JOURNAL* 13, 87-98
- 北星学園大学 (2023) 「オンライン国際共修サイト HGU-COIL Project」【Online】<https://www.hokusei.ac.jp/international/coil-project/>(2024 年 1 月 4 日閲覧)
- 森沢洋介 (2007) 『スラスラ話すための瞬間英作文シャッフルトレーニング』ベレ出版
- 文部科学省 (2018a) 「平成 30 年度「大学の世界展開力強化事業～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」の選定事業の決定について」【Online】https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/sekaitenkai/1408256.htm(2024 年 1 月 4 日閲覧)
- 文部科学省 (2018b) 「大学の世界展開力強化事業」【Online】https://www.jsps.go.jp/jtenkairyoku/sentei_jigyoo_h30.html(2024 年 1 月 4 日閲覧)

【付録1】 UNC の 2024 COIL Curriculum Development Award Letter



THE UNIVERSITY OF NORTH CAROLINA AT CHAPEL HILL
OFFICE OF THE VICE PROVOST FOR GLOBAL AFFAIRS

FedEx Global Education Center | Campus Box 5145
301 Pittsboro Street | Chapel Hill, NC 27599-5145
global.unc.edu

COIL Curriculum Development Award Letter – Repeat Award November 27, 2023 Yuki Aratake College of Arts & Sciences Department of Asian and Middle Eastern Studies yaratake@email.unc.edu Dear Yuki, Thank you for renewing your contributions to the Connecting Carolina Classrooms with the World initiative by continuing to integrate COIL into your course. As part of providing ongoing support to faculty, the Office of the Vice Provost for Global Affairs is offering you a Repeat Curriculum Development Award for COIL in the amount of \$2,500. This award will support the continued integration of COIL elements into JAPN 401: Gateway to Mastering Japanese, in partnership with Hatsuko Itaya at Hokkaido Musashi Women’s Junior College, that you will teach in Fall 2024. To accept this award, please initial the conditions below, sign and return this letter. *Since funds will be disbursed as an overload payment through payroll as compensation for your planning time, please confirm you are eligible for this overload with your business office.* The award will be disbursed at the conclusion of the semester in which the course is taught. Faculty will also be expected to submit their end of semester evaluation survey at this time. Please inform the OVPGA as soon as possible of any changes to your proposed course from your submitted application, so that we can coordinate adjustments to your award if applicable. Please initial by each of the conditions required to accept your award: ____ Submit your UNC course syllabus acknowledging COIL activities (see text in the COIL group on Sakai) before the first day of the semester. Please be sure to include specific details about the assignments, such as platforms used, types of interactions between students and their peers at the partner institution, and

expected learning outcomes.

_____ Participate in one of our COIL course design workshops.

_____ Join COIL learning community events, as available, and remain in contact with program organizers about your impressions of COIL activity.

_____ Support program assessment by encouraging your students to complete surveys before and after COIL activities.

_____ Provide feedback within one month after the course ends describing COIL activities implemented and reflecting on successes and challenges.

_____ Acknowledge support from the Office of the Vice Provost for Global Affairs on any related publicity.

_____ Authorize OVPGA to include information about your award and COIL activities on the UNC Global website or in other publicity.

Sincerely,

Barbara J. Stephenson, PhD Vice Provost for Global Affairs and Chief Global Officer U.S. Ambassador (Retired)

CC: Sharmila Udyavar, Associate Director for Global Education, Office of the Vice Provost for Global Affairs

Morgan Pitelka, Department of Asian and Middle Eastern Studies Chair, College of Arts & Sciences

Recipient Acceptance:

I accept this award and agree to its terms.

Yuki Aratake

【付録 2】 協力学生応募用紙例

Full Name:

Name of School: West Moreton Anglican College

When did you start learning Japanese language and why did you start learning Japanese over other language?

I started learning Japanese in year 7, because it was compulsory to select between Chinese and Japanese. Most people chose to learn Chinese but I wanted to be different so I chose Japanese. I continued the subject because I find Japanese culture fascinating and I want to learn more. I also appreciate the skill of speaking a foreign language. Though it can be challenging, I find the results very rewarding.

Why are you interested in this Program?

I want to extend my Japanese knowledge by practicing my communication skills with native speakers. I'm hoping that this program will help both myself and the Japanese students learn more about each other's language.

What is your image of Japan?

I see Japan as a small country that is surrounded by colourful landscapes and embedded with a unique and joyful culture.

【付録 3】 UNC との COIL 授業に関する日本人学生アンケート結果 (12 名)

第 1 部：COIL 授業について

1) COIL 授業はどうでしたか？

- ①全く良くなかった (0 人) ②あまり良くなかった (0 人)
③どちらでもない (0 人) ④良かった (2 人) ⑤とても良かった (10 人)

2) 1) のように回答した理由を書いてください。

〈主に英語力の向上について言及している回答〉

- ・英語力を伸ばせた。
- ・楽しく英語に触れることができた。
- ・やる前より英語が理解できるようになった。
- ・英語で自分の意見をしっかり言う大切さがわかった。
- ・日本にいると英語を話す機会が少ないので、スピーキングを伸ばしたい自分にとって良かった。

〈英語力向上の他に交流そのものの意義について言及している回答〉

- ・プレゼンを通して、日本についても理解が深まった。
- ・UNC の学生は勉強熱心で積極的に発言しているので刺激になった。
- ・他のゼミでは経験出来ないであろう、海外の学生との交流が出来た。
- ・アメリカの学生と話す機会は減多にないので、楽しかったし、面白かった。
- ・ネイティブと話す機会、特に同じ年代の人と話す機会がないので、良かった。
- ・アメリカ人の考えを直接知ることができたし何より言語交換ができて良かった。
- ・同じ年齢の大学生と実際に会話をし、ネイティブの英語を知ることが出来ました。
- ・外国人と関わる時間が欲しかったので、嬉しかったし、プレゼンを通して新たな発見がたくさんあった。

・相手の人数が多く、自分を覚えてもらうのに常に英語表現を考えて発言したので有意義な時間だった。

3) COIL 授業のトピックの中で、一番よかったことに1、次に2、そして3、4、5と番号を書いてください。

1位：大麻・ドラッグ（平均点1.7点）

2位：同性婚（平均点2.0点）

3位：環境問題（平均点3.4点）

4位：女性の社会進出（平均点3.7点）

5位：大学の紹介（平均点4.0点）

4) もしまた COIL 授業ができるとしたら、扱ってみたいトピックと、その理由を書いて下さい。

大麻・ドラッグ（違いが大きいから）（2人）/自然災害（地震、台風）/礼儀・振る舞い・性格（身近で難しくない話題のほうが盛り上がる）/犯罪（アメリカの事件のスケールを知りたい）/互いの国の独特なルール/学校のセキュリティ（2人）/就職活動の違いについて/休日の過ごし方/イースターやハロウィーンなどの行事/避難訓練/

5) あなたが COIL 授業で良かったことは何ですか？当てはまること全部に丸をつけてください。

外国人と会話ができた（10人）/英語の上達（8人）/文化の違いがよくわかった（8人）/外国人の友達ができた（7人）/日本語も使うことができた（6人）/英語を本当の交流で使えた（6人）

6) 5) 以外で、あなたにとって良かったことを書いてください。

〈コミュニケーション能力の向上を感じていると思われる回答〉

・日本の問題を再認識できた。

・頑張って工夫しながら伝えた経験。

- ・ネイティブの話すスピードに慣れた。
- ・単語がわからなくても伝えようとする工夫が身についた。
- ・UNC の学生はよくジェスチャーを使っていた印象があり、わかりやすいので参考になった。

〈異文化交流を楽しみそこから気づきを得たと思われる回答〉

- ・楽しむことができた。
- ・アメリカ人の考え方やとらえ方を学ぶことが出来た。
- ・日本語を外国人に教えることの難しさを知ることができた。
- ・年齢層が同じなので話しやすかったし、雑談が楽しかった。
- ・自分にとっての当たり前が外国の人には当たり前でないということがわかった。
- ・アメリカについてインターネットでもでてくるが、実際にアメリカ人から聞くとより詳しく色々と理解できる。

7) 6回という COIL 授業の回数はどうでしたか？

- ①多い (0 人) ②ちょうど良い (9 人) ③少ない (3 人)

8) COIL 授業は何回がいいと思いますか？

回答平均 6.2 回

9) COIL 授業は 1 時間でした。長さはどうでしたか？

- ①長い (0 人) ②ちょうど良い (10 人) ③短い (2 人)

*「あつという間に時間がすぎてしまうように感じたため、授業時間は 90 分あってもいいと感じた」と欄外に記入していた学生がいた。

10) COIL 授業の長さは何分が良いと思いますか？

回答平均 65 分

11) COIL 授業でプレゼンをするのはどうでしたか？ 当てはまること全部に丸をつけてください。

やりがいがあった (10 人)/英語の勉強になった (9 人)/準備が大変だった (9 人)/大変だったがやって良かった (7 人)/楽しかった (6 人)/時事問題の勉強になった (5 人)/緊張した (5 人)/つまらなかった (0 人)

12) プレゼンの準備と発表に学習効果はあったと感じますか？

①全くなかった (0 人) ②あまりなかった (0 人) ③どちらでもない (0 人) ④少しあった (2 人) ⑤あった (10 人)

13) COIL 授業のブレイクアウトルームはどうでしたか？

①全く良くなかった (0 人) ②あまり良くなかった (0 人) ③どちらでもない (0 人) ④良かった (6 人) ⑤とても良かった (6 人)

14) 13) のように回答した理由を書いて下さい。

〈少数数のメリットを感じていると思われる回答〉

- ・少数数で話しやすい。
- ・意見を言いやすかった。
- ・少数数で発言しやすかった。
- ・たくさん話せて英語が上達した。
- ・深く話し合いをすることができた。
- ・少数数なので緊張もほぐれて話しやすかった。
- ・1人1人が何かを発言しないといけない時間だったので、積極的になれた。
- ・気まづくなったり、楽しく出来たりと、色々な状況で会話をする事ができた。
- ・英語と日本語のどちらも使えるから、通じないところあまりなく交流することができた。
- ・素朴な質問をすぐにききあえたし、外国人と話す減多にない機会なので、とても楽しかった。

〈少人数による負担増加を感じていると思われる回答〉

- ・ 英語の時間に話さない人や、日本語を使う人がいた。
- ・ 英語の時間になると急にたくさん質問されて大変だった。
- ・ 日本語と英語の両方が使えて良かったが、語彙力と知識不足を実感した。
- ・ 意見交換は楽しかったが、難しいテーマになると英語で話すのが難しかった。

15) 「どんどん話すための瞬間英作文トレーニング」は、話すための有効なトレーニング法だと思いますか？

- ①全く有効ではない (0人) ②あまり有効ではない (0人) ③どちらでもない (1人) ④有効 (6人) ⑤とても有効 (5人)

16) 前期に行ったオーストラリア学生との交流は、後期の COIL 授業の準備として有効だったと思いますか？

- ①全く有効ではない (0人) ②あまり有効ではない (0人) ③どちらでもない (1人) ④有効 (4人) ⑤とても有効 (7人)

17) 武蔵生が UNC との COIL 授業により積極的に英語で参加をするために、授業でどんなトレーニングをすればいいと思いますか？

- ・ 語彙力をつける。
- ・ ネイティブの英語に慣れる。
- ・ 教室に入ったら日本語禁止。
- ・ 自分の意見を言うトレーニング。
- ・ 学生同士で質問を投げかける練習。
- ・ 会話をしながら質問ができるようになるようにする。
- ・ 英語が速くて置いて行かれたので、速さになれる必要がある。
- ・ スラスラのテキストをもっとやり、また、授業でもっと英語を話す。
- ・ 色々なアクションの取り方や、質問の仕方をトレーニングしたらいいと思う。

- ・前期にオーストラリア人と話したように、英語で話す機会をたくさん作るのが良いと思う。
- ・わからないときに黙ってしまう日本人がいるが、「何を聞かれたかわからない」「単語の意味がわからない」などと反応する方法を学ぶ。

第2部：バディシステムについて

18) バディシステムはよかったですか？

- ①全く良くなかった (0人) ②あまり良くなかった (0人) ③どちらでもない (0人) ④良かった (7人) ⑤とても良かった (5人)

19) バディシステムのトピックで一番よかったことに1、次に2、そして3、4と番号を書いてください。

1位：Socializing at Parties & Dating and Romance (26点)/2位：Family Life (27点)/3位：Holidays (30点)/4位：教育制度 (37点)

20) もしまたバディシステムができるとしたら、扱ってみたいトピックとその理由を書いて下さい。

食文化 (違いを知りたい)/いじめ (違いを知りたい)/パーティー/お互いの国の暗黙の了解/学校のセキュリティ/アルバイト/互いの国での流行/国の歴史/住宅事情/ファッション/

21) バディシステムで良かったことは何ですか？ 当てはまること全部に丸をつけてください。

外国人と会話ができる (10人)/文化の違いがわかった (9人)/外国人とのメールのやりとり (7人)/英語の上達 (6人)/外国人の友だちができた (6人)/日本語も使うことができた (6人)/先生がいないので自由に会話できた (5人)

22) バディシステムで大変だったことはありましたか？ 当てはまること全部に丸をつけてください。

時間を合わせること (11 人)/パートナーからのメールが来なかった (5 人)/英語でうまく話せなかった/相手からお願いした期日までに添削が戻ってこなかった (4 人)/ネットの接続が悪かった (1 人)/パートナーと気が合わなかった (0 人)/そこまで大変なことはなかった (0 人)

23) 21) と 22) 以外で、良かったことや大変だったことを自由に書いて下さい。

〈得た学び等について言及していると思われる回答〉

- ・伝えたいことを英語に変えるのに苦労した。
- ・アメリカ人の日本語も理解できないときがあった。
- ・正確な英語で返ってくるから、良い勉強になりました。
- ・第二言語での表現方法がわからないときに、すぐに教えあうことができて良かった。
- ・連絡先を交換できたので、この先も話すことができるし、SNS でも相手の様子もわかる。

〈UNC の学生がルールを守らないことに関する苦労〉

- ・UNC から添削が1度しか戻ってこなかった。
- ・お互いにエッセイに対する必要なことや期限、添削方法も違っていたこと。
- ・2人の添削を担当したが、1人から4ついっぺんに送られてきて大変だった。

24) バディシステムで実際に使われていた言語の割合を、合計で 100%になるように書いて下さい。

英語 [平均 62] % 日本語 [平均 38] %

25) バディシステムで会ったのは4回でしたが、何回がいいと思いますか？

回答平均3.8回

26) バディシステムで会っていたのは、1回あたり平均何分でしたか？

回答平均50分

27) バディシステムのレポートを、バディに直してもらった経験はどうでしたか？

①全く良くなかった(0人) ②あまり良くなかった(0人) ③どちらでもない(0人) ④良かった(6人) ⑤とても良かった(6人)

28) 27) の回答の理由を書いて下さい。

〈添削の有効性を感じている回答〉

- ・自分の間違いに気づけた。
- ・ネイティブの使う英語を知ることができた。
- ・短く済む表現方法を教えてもらい満足した。
- ・実際に使われている英語を学ぶことができた。
- ・間違った表現をしっかりと直してもらって勉強になった。
- ・バディが理由を細かく説明してくれて学びにつながりました。
- ・文法の間違いは指摘されないと気が付かないので勉強になった。
- ・文法的には正しいが不自然な表現をネイティブらしく直してもらえた。

〈UNCの学生がルールを守らないことに関する苦勞〉

- ・人によって添削の量にばらつきがあったが、良い経験だった。
- ・返信が来なかったり、期限内に添削が戻ってこなくて大変だった。

29) レポートをパートナーに直してもらった経験は、通常の授業で教員に添削してもらった経験と比較してどうでしたか。学ぶ内容の違いや、学習効果やモチベーションの違いなど、感じたことを自由に書いて下さい。

〈ネイティブからの添削を有効と考えている回答〉

- ・自分の表現で英語を書くことが意識できた。
- ・「生きた英語」を学べたのが一番大きかった。
- ・気軽に話せるし、メール等で簡単に連絡が取れる。
- ・実際に使われている表現やより自然な表現を学べて良かった。
- ・質問をしやすく、ネイティブの言葉の言い換えのフレーズを学べた。
- ・文法の間違えだけでなく、より良い書き方を教えてもらったのが良かった。
- ・より質問しやすい。添削が返ってくるのが遅いときがあったが、丁寧に直してもらった。

〈それ以外の回答〉

- ・特に違いはない。
- ・コメントがなかったので、先生の添削のほうがわかりやすい。
- ・パートナーの添削はネイティブのリアルな感じだし、教員は対面で教えてもらえるのでどちらも良い。
- ・先生の添削との違いはないが、パートナーに細かくわからないところを教えてもらう経験は良かった。

第3部：COIL 授業（含バディシステム）の総合的振り返り

30) COIL 授業はあなたの学習意欲を高めましたか？

- ①全く高めない（0人） ②あまり高めない（0人） ③どちらでもない（0人） ④高めた（6人） ⑤とても高めた（6人）

31) COIL 授業はあなたの英語力を高めましたか？

- ①全く高めない（0人） ②あまり高めない（0人） ③どちらでもない（0人） ④高めた（7人） ⑤とても高めた（5人）

32) あなたは COIL 授業と COIL 以外の授業を選べるとしたら COIL 授業を選びますか？

①選ぶ (12 人) ②選ばない (0 人)

33) COIL 授業から得た気づき、学び、感想、COIL 授業を発展させるアイデアなどを自由に書いて下さい。

〈学びを得たことを実感している回答〉

- ・とてもためになった。
- ・コミュニケーション能力があがった。
- ・リアクションの取り方も少しだけ学べた。
- ・ネイティブと話すのが一番英語の勉強になる。
- ・話すスピードが速く、耳を慣らすのにとっても良い。
- ・とても楽しく海外の学生の価値観や考え方について知ることが出来た。
- ・武蔵生の前より、ネイティブの前のほうが緊張せずに頑張って話せた。
- ・アメリカの文化を学べて、毎回新しい発見があって有意義な時間でした。
- ・初めはブレイクアウトでも全然話せなかったが、だんだん話せるようになった。
- ・授業は大変だったし、理解するのが難しかったが、たくさん学べて面白かった。
- ・アメリカの文化やアメリカ人がよく使う単語などを実践の中で学ぶことができた。
- ・アメリカ人は積極的だと感じたし、自分ももっと勉強しなければならないと思った。
- ・話そうとする勇氣や自分の意見を大切にすることができて、とても成長できた。

〈経験の楽しさに言及する回答〉

- ・ブレイクアウトルームでもっと長く話したかった。
- ・「授業」というより「ネイティブと話せる楽しい時間」だった。

〈それ以外の回答〉

- ・軽いトピックがあるともっと話しやすいと感じた。
- ・ネイティブのスピードが速く、聞き取るのが大変だった。
- ・少人数のほうが話しやすいので、1対1で話してみたい。

第4部：あなた自身の振り返り

34) あなたの専門ゼミの学習全てに対する取り組みを、自己評価してください。

- ①できる限りの取り組みをした(7人) ②だいたい取り組みえた(5人)
③取り組みの足りないところがあった(0人)

35) 短大生活を振り返って(ゼミ以外も含めてトータルで)、得た学びについて自由に書いて下さい。

〈英語や異文化交流について言及している回答〉

- ・スキルアップになったし、海外の友達もできた。
- ・海外の学生と交流が出来たのが自分の中で大きな学びだった。
- ・英会話は普段出来ないのが、自分にとって貴重な機会になった。
- ・海外の方と交流が多く、異文化理解についても考えさせられるゼミナールで楽しかった。
- ・英語が向上し、プレゼンテーションの仕方や準備の仕方などを学べて、成長を実感した。
- ・入学時よりも英語力が付いた。話すことも聞くこともできなかったが、今はできるようになった。
- ・英語はもちろんのこと、他の文化や歴史などたくさん新しいことを学べたし、英語力が上がった。

〈英語以外の学びを中心に言及している回答〉

- ・積極性の大切さを実感した。
- ・高校と違い、社会で必要なことを学べた。

- ・プレゼンやグループ学習は力を入れて行った。
- ・勉強面とともに、精神面でとても変わることができた。
- ・授業以外では、礼儀や言葉遣いを学ぶことができた。
- ・友人に恵まれ、多方面からの刺激に感化され、挑戦心が強くなった。
- ・授業で社会問題について自分の意見を言う機会があり、勉強になった。
- ・社会にでるに向けて、勉強面も人間性も大きく成長できた2年間だった。
- ・他のゼミと比べるとやることが多く正直大変だったが、そのぶん力になったと思う。
- ・知識も大切だが、コミュニケーション力や思いやる気持ちも重要だと改めて感じた。

【付録4】 オーストラリア人協力学生2名からの事後コメント

〈協力学生 A さん〉

The whole program was very useful for learning about different culture while also learning a different language. I noticed that at the start the students did not have much confidence with speaking English but as the program and classes went on they grew more confident and spoke more in the separate groups. The students who talked more in the sessions and asked more questions had better English which I think helped in their confidence with speaking English.

Even though I was the one teaching the students English and about Australian culture I also learned new things about Japan, its culture and some Japanese. I didn't utilise the opportunity of being able to talk to native speakers well enough, however, when Ade and I did think of questions to ask the students our understand of Japanese and Japanese culture grew greatly. The classes were fun, especially when we were able to discuss the topics to a greater extent and compare the differences in our cultures, which I think made learning English more enjoyable for the students.

Another observation is throughout the sessions I continued to use English phrases that was not usually taught which might have made it harder for the students to understand. However, I think that it was a good thing because a lot of Australian, American and British media uses casual language and phrases that makes sense to native speakers but not those learning English. I didn't hear any of them use these phrases but I do think that being exposed to it allows them to learn different vocabulary and ways of conveying their thoughts in English better.

〈協力学生 B さん〉

During my year 12 studies, I was given the opportunity to participate in the online language exchange program through Hokkaido Musashi Women's Junior College. When I accepted this offer, I was looking forward to interacting with young Japanese students, teaching them about Australia, helping them with their English and improving my knowledge of the Japanese language and culture. As expected, the students were a little shy at first, but after the initial ice-breaking session, we became a lot more comfortable with each other. Through their spoken and written responses, I could tell that they were very ambitious and hardworking students and by the last session, I noticed that their confidence in English had improved significantly. One feature of the classes that I thought was very beneficial was the break-out rooms as it gave the English and Japanese students space to freely converse in their language of study. In addition, the PowerPoint presentations we exchanged about certain worldly topics allowed us to learn more about each other's government, culture and history. I believe the cultural differences that were highlighted broadened our perspectives on certain global debates. Overall, I believe this online exchange was well organised and contributed greatly towards the language studies of myself, Maya and the Japanese students. Some of the Japanese students even contacted me after our last class asking me questions about English. There is

only so much one can learn in a classroom, so I believe programs like this are a great opportunity for students to learn directly from native speakers about their language and their culture. I would definitely consider doing this course once again and would happily recommend participation to other language students.

【付録5】UNCの担当教員の感想

初年度のCOILクラスは試行錯誤の段階でしたが、2年目では1年目と比較してCOILクラスがより円滑に進行した印象があります。ただし、アメリカの学生数と日本の学生数が同数ではなく、アメリカ側が倍の人数だったため、グループを構成してもバランスが悪かったです。特に、グループ内で日本人が相対的に少なかったため、武蔵の学生は昨年よりもっと英語を使用する必要があった可能性があります。

武蔵の学生たちは、昨年と比較して、英語でコミュニケーションを積極的に取る学生が増えつつも、発言が少ない学生も見受けられ、二極化が現れました。このトレンドはアメリカの学生にも共通しています。英語を積極的に使用する学生たちのスキルは昨年よりも向上しているように思えます。武蔵の学生たちの英語でのコミュニケーションへの積極的なアプローチは、昨年よりも一段と強く感じられました。同様に、発表においても昨年よりも発音が向上し、理解しやすくなったと印象を受けました。